

【活動報告】7/11～15 府中市生活援護課との協働・連携事業を実施しました

7月11日(月)から15日(金)に、府中市生活援護課と本学との協働・連携事業を実施しました。府中市内在住の、経済的な困難を抱える家庭の中学生が対象の学習支援教室(市内5カ所)で、本学の学生が話をする機会をいただきました。この事業は昨年度初めて実施しました。今回は2回目の開催となります。学生への依頼の趣旨は、「外の世界と接する機会の少ない学習支援教室に来ている中学生に対し、大学生と直接関わり合い、リアルな大学生活などを共有することで、自分の未来について考えるきっかけを作る」ことでした。

今年度は昨年度に比べ、大学に入学したばかりの1年生の参加者が多く、話す内容で迷ったようですが、VOLASの職員と相談しながら準備し当日を迎えました。本学の11名の学生の中から毎日4名ずつ教室へ赴き、以下のような流れで活動を進めました。

1) 学習支援教室で毎週活動しているボランティア、府中市担当者と打ち合わせ

2) アイスブレイク「自己紹介ゲーム」

(教室運営をしているNPO法人「育て上げネット」のスタッフによる)

3) 子どもを4グループに分け、それぞれのグループに学生が1名ずつ入り話をする。20分ずつ4回繰り返す(途中休憩を挟む)

4) 参加している子どもたち、本学学生、教室スタッフと一緒に学生から聞いた話についてシェア、ふりかえりをし活動終了

学生にとっても、今までの高校・大学生活をふりかえり、考えを深め、成長する機会となったことと思います。

なお今回教室スタッフが実施したアイスブレイク「自己紹介ゲーム」は、昨年の教室で本学のある学生が行ったアイスブレイクを、全てのグループで実施するように導入したものでした。昨年のふりかえりを生かして、よりよい教室にする工夫がされていました。

以下、本学学生のふりかえりを抜粋で紹介します。

1日目は自分の中で話の内容がぼんやりしたままでの挑戦でした。話の順番を誤ったり同じ話を繰り返したりと失敗し、中には目を向けてくれない子どもがいました。自分から話を振ることはできても子どもの返答を拾っての会話を続けられず、自分の話を一方的に伝えるばかりでした。学習支援スタッフや市役所の方々が相槌や質問をして下さったため、いくらか気持ちは楽になりましたが、如何に子どもたちと対話するかが私にとっての課題となりました。1日目の準備不足の反省から、2日目は要点を絞って自分も子どもたちも理解しやすくなるよう努めました。それにより上手くまとめられないことへの不安が消え、話の途中で戸惑うことが無くなりました。積極的に話しかけるうちに子供たちと話すことにも慣れ地元のゆるキャラや恋愛の話で盛り上がりました。一方で、おしゃべりな子と話すのに夢中になり、おとなしい子を置いてきぼりにしてしまったことがありました。とても申し訳なく、悔しいです。(略)

最後に、この2日間は自分の未熟さと可能性を発見できた貴重な経験になりました。皆様ありがとうございました。

(国際社会学部マレーシア専攻1年 亀山祐樹)

(前略)自分自身の経験話すことで、自分が今まで何に興味を持ち、何を頑張ってきたのかということを考え直すことが出来ました。また、自分の経験を大切にしていきたいと思うようになりました。大学1年生の自分にとってこれからの大学生活をどう過ごしていくのかと考えるのに役立っていくのではないかと思います。

(国際社会学部フィリピン専攻1年 杉山優華)

今回、私は中学、高校、大学での経験を基に「自分から動いていくことの楽しさ」をニュアンスとして伝えようと試みた。中学では野球部の練習など受け身の姿勢での関わり合いが多く、惰性で行っている感が否めなかったが、高校ではバドミントン部でトレーニングメニュー担当として主体的に練習を構成していったから練習に工夫をこらすようになり上達が比較的早かったこと、整美委員会で委員

長として活動実績のない状況を憂いてエコキャップ運動を率先して企画、運営して徐々に周囲の協力を得られたこと、そして、大学では、生協学生委員として生協購買部でのメロンパン祭りに積極的に参画し、1000個分の商品の仕入れから広報、装飾、集計まで大規模で、かつ、責任のある大学生活の一片を垣間見たことを話した。

話を聞いてくれた子どもたちは「エコキャップ」や「メロンパン祭り」といった特異なワードに興味を持ってくれ、熱心に話を聞いてくれた。でも、果たして私の話の趣旨を汲み取ってくれたのだろうか。子供たちに感想を聞くと「メロンパン祭りすげえ」とか「メロンパン祭り、おもしろそお」というものが多かったが、「メロンパン祭りを通じて得た、主体的行動の楽しさ」をちょっとだけでも伝えられたのだろうか、不安だ。

「メロンパン祭りやエコキャップ運動みたいなことをやってみたい」という気になって、実際に彼ら自身が経験からなにかを感じ得るきっかけになれば嬉しい。

(国際社会学部英語専攻1年 佐藤 駿)

私は自分自身の中学、高校のときの体験と、どうしてその時期に「勉強」をしなければならないのかについて自分なりに考えたことを話しました。話すテーマは昨年この活動に参加された先輩方の話を参考にして決めましたが、いざ細かく何を話すかについて考える作業は想像以上に難しかったです。当たり前のことですが、今まで経験してきたことは人それぞれ異なります。そして、話した内容を聞き手がどのように受け取るかも人によって異なりますし、発信した側からそれを知ることは難しいものです。そのような内容を中学生に分かりやすく伝え、少しでも興味を持ってもらえるようすることの難しさを、活動の準備の段階から強く感じました。

当日の活動についてですが、私の話した内容がどのように中学生たち受け取ってもらえたのかは、正直に言うと、私には分かりません。色々な中学生がいて、私の話す内容に興味を示し、身を乗り出して写真を見ようとしてくれる子もいれば、ずっと下を向いてしまっている子もいました。それももちろん当たり前のことで、私の話した内容は中学生たちにとってはつまらないものであったかもしれませんし、自慢話のように聞こえてしまったかもしれません。今回の活動の中での私の一番の反省点は、そのことに私自身が気づいていながらも何も対処できなかったことです。しかしながら、写真を活用したり、小さなことであっても中学生に質問したりしたことで、コミュニケーションの機会が増え、少しは改善することができたと感じています。

ありきたりな感想ですが、事前に活動内容を先輩方から聞いたり自分で想像したりすると、実際に自分自身が活動を経験するのでは、全く異なりました。それは、「よい経験でした」と一言で書き表せるようなものでは決してありません。初対面の人と実際に接する上で必要であること、知っているべきであることに改めて気づかされました。私自身が最も強く中学生に伝えなかったことでもあり、綺麗ごと聞こえてしまうかもしれませんが、このような経験の積み重ねが、いつかあるとき、想像もしていないようなところで、他の何かと繋がるのかもしれないと思うと、それは少し楽しみでもあります。今回はこのような機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

(国際社会学部イタリア専攻1年 小林史緒)

東京で暮らす子どもたちにとって、田舎で育ってきた私の暮らしは新鮮かなと思い、田舎での暮らしがどのような感じだったのか、自分の体験を写真やクイズを交えて話しました。また、大学1年間で学んだこととお話しました。

伝えたいことを明確にはしていなかったので、話をどうまとめようかと最初は困りましたが、話していくうちに自分の中でも伝えたいことが明確になっていきました。子どもたちは、写真やクイズで盛り上がってくれたり、私の小学生の時の同級生の少なさに驚いてくれたりしました。写真はどの子も身を乗り出して見ていたし、クイズは恥ずかしがりな子どもでも参加できるので、試してみてよかったと思いました。(略)

自分の課題もたくさん残りましたが、自分の話をしていくうちに、自分が今に至るまでに多くの人に支えられたり、たくさんの経験をし

て成長してきたことを再確認することもできて、私自身にとって良い機会になりました。

(国際社会学部アフリカ地域専攻 2年 妻井瑞季)

今回は中学から大学までの写真と私自身の世界観が変わった農家民宿でのボランティア経験をまとめた紙を持参し、子ども達に見せました。

これらの話をして伝えたかったことは二つあります。

一つは、私が中学から大学までどのような性格で何をしてきたかを話すことで、こういう人もいるんだという発見をしてもらうことです。私自身多摩地域出身なので中学や高校の話は少し身近に感じてもらえるかな、こういう理由で高校を選ぶ人もいるんだと思ってくれればいいな、という思いで話しました。

二つ目は、自分の将来は自分が選択するということです。これは農家民宿のオーナーさんの言葉で、私もハッとさせられた言葉です。中学生は進路などで悩むことも多いと思います。ただ自分で選んだんだという自覚を持てれば不安や悩みは少し和らぐというのは就職活動を通して私自身実感したことであったため、伝えようと思いました。

実際に話してみると、他にも伝えたいことが多くて上記の二つを簡潔に伝えるのが難しかったです。それでも中学や高校の時の部活や学園祭の写真を見せると、身近に感じられて興味を持ってくれたのか、多くの子ども達が興味津々に見てくれて嬉しかったです。また、回を重ねていくうちに用意してきた全てを話す必要もないかなと思い、子ども達の反応に合わせて話をするように工夫しました。

この学習支援を通して、私自身を改めて見つめ直すきっかけになったし、普段話すことのない中学生と話ができて楽しかったです。また、私の話を聞いて伝えたかったことを感じ取ってくれた子もいて、とても嬉しかったです。全体を通しては、一人でも私達誰かの話が響いてくれたら嬉しいし、そうでなくても別のところで何かに挑戦して学び取ろうと思えるような機会になればいいな、と思いました。今回の学習支援だけでなく、色々な人に話を聞いてみたりすることで彼らの世界観がどんどん広がればいいなと心から思います。

(言語文化学部日本語専攻 4年 須藤楓)

とにかく自分にとって最も大きな経験となった出来事を話そうと考えた結果、大学受験での宅浪の経験を軸に、自分の考え方がどのように変わっていったかを話しました。

内容としては、笑えるような要素が少なかったのが、最後まで聞いてもらえるか心配でしたが、最後まで真剣に、一生懸命に話を聞いてくれる子どもたちが多く、嬉しかったです。また、伝えたいことを一つに絞って、記憶に残りやすいような構成にした点も良かったのではないかと思います。

話し方としては、自分の考え方が上手く伝わるように、なおかつその考え方を押し付けずに、子ども達自身で考えてもらえるように話すのが難しいと感じました。また、話の序盤では意識的に子どもたちに話を振って、会話に引き込むことができたものの、話が進むにつれて話すことに夢中になってしまい、だんだん話を振る回数が減ってきてしまいました。そのため話の終盤では、子どもたちの集中力が切れてしまっているように感じました。ここが特に自分がまだまだ未熟だと感じる点で、長い話でも最後まで飽きさせないためには、もっと人前で話をする経験を積み、慣れていく必要があると思いました。

全体を通して印象に残ったことは、勉強が嫌いだと言う子どもたちに、その理由を聞いてみると、「なんとなく」や「めんどくさいから」というようなあまりはっきりしない理由が多いということです。今回の活動をきっかけに子どもたちが今より勉強と向き合うようになり、少しでも勉強の楽しい点に気付いてくれれば嬉しいですが、もちろん勉強だけに限らず、何かに全力で取り組むようになってくれればと思うと、とてもやりがいを感じました。

(国際社会学部英語専攻 4年 泉原兵馬)

昨年も参加したこの活動。前回は旅の話を中心にし、クイズを多めに入れて楽しく、そして最後にまとめを入れるというようなやり方をした。その時は、中学生の時にはなかなかイメージの湧きにくい世界の国々について、自らの経験を通して面白く伝えることに専念した。しかし全体的に世界の話が多かったため、海外に出る＝素晴らしいことという価値観を植え付けてしまったのではないかという反省点も出た。そこで今回は、私が大学生活を通して行ってきたことをもとに、大学とはどのような場所か、どのようなことが出来るのかについて話した。

今回難しかったのは、抽象的な話をする中で生徒を話にひきつける事であった。クイズ中心であれば、生徒にも気軽に話に参加してもらうことが出来るが、大学とはどのような場所かという話の中では相互的なコミュニケーションがとりにくく、前回と比べて生徒の集中力が切れてしまったという反省がある。しかし、その分自分の伝えたいことを多く、キーワード化して深く話すことが出来、より生徒たちの今後に生きるようなキーワードを生徒の頭の中に残すことが出来たのではないかと思う。

前回は今回も、伝えたい内容はほぼ同じだ。私自身、中学や高校の時には想像もしていなかったような面白い世界が、大学では見えてくる。その準備として、高校や中学の勉強を位置づけてもらいたい。その勉強が、もっと面白い世界に繋がっている。私の話を聞いて、少しでも、今の勉強に「テストの点数」以上の意義を見出してもらえていれば幸いだ。

(言語文化学部英語専攻 3年 関谷昂)

日時: 2016年08月16日